

=====

GCOE NewsLetter

[No.53 2012/2/28]

-----

ジャン・ガスク教授（パリ第4ソルボンヌ大学）の講演会

高橋亨先生の最終講義

名古屋大学レクチャー2012

「日本文学と日本文化をめぐって語る」の概要

西洋中世(ラテン語)・近世フランス古文書学ワークショップの概要

「テキスト布置解釈学概論」（講義科目）の要約

「テキスト布置解釈学各論」（講義科目）の要約

=====

---

■ ジャン・ガスク教授（パリ第4ソルボンヌ大学）の講演会

---

日時：2012年3月16日（金）14:00-16:00

場所：名古屋大学文学研究科大会議室

題目：Egyptian hagiography and Religious History : open meaning; hidden meaning

---

■ 高橋亨先生の最終講義

---

GCOE 事業推進担当の高橋亨先生（日本文学）の最終講義が行われます。

日時：2012年3月16日（金）16:30-18:00

場所：文学研究科 237 講義室

題目：「物語学の課題」

---

■ 名古屋大学レクチャー2012

「日本文学と日本文化をめぐって語る」の概要

---

2月21日（土）名古屋大学豊田講堂において2012年名古屋大学レクチャーが本プログラムとの共催で行われた。今回は、日本文学研究のドナルド・キーン氏（コロンビア大学名誉教授）と日本演劇研究の鳥越文蔵氏（早稲田大学名誉教授、早大演劇博物館顧問）を招き、「日本文学と日本文化をめぐって語る」

と題する公開講演会を開催した。前半は鳥越教授の「日本文化における芸能」と題する講演で、近世上方歌舞伎研究の権威としての立場から近松門左衛門『曽根崎心中』における商家の手代の徳兵衛と北新地の遊女お初の情死から劇を起こした近松がアリストテレス的悲劇を超える世界を創出しえたことと再評価したキーン氏のテキスト解釈の意義と当演目の復活に寄与したキーン氏の学業を平易な言葉で顕揚した。また幕末明治維新时期における伝統演劇の危機に際して河竹黙阿弥が果たした役割をキーン氏の世界演劇の視点からの評価と合わせて解説した。

後半がキーン氏による「世界の中の日本文学」と題するレクチャーであった。キーン氏によれば、日本文学が古代から存在したことは明らかだが、それを最初に認識したのは8世紀に成立した『日本書紀』所載の歌謡を目にした中国人であった。次いで16世紀に日本にキリスト教を布教しようとしたイエズス会宣教師が日本語学習の教材として選んだ『平家物語』をカトリック修道僧に紹介した。キリスト教禁教後の長い鎖国を経て日本文学が世界に知られるようになったのが幕末明治期にかけてジャポニスムの流行に伴ってフランス人が日本文学に注目し、それを継いだ英国人が『源氏物語』の英訳に成功し、世界を驚かせるに至るまでの苦闘を論じた。現在では、多くの古典文学を始め近現代の日本文学が盛んに翻訳され、世界の中で確実に存在感を増していると締めくくった。

濱口道成名古屋大学総長よりキーン氏に名古屋大学レクチャーシップが授与された。

本プログラム拠点リーダー佐藤彰一文学研究科特任教授がレクチャーの総括に際して両教授の講演を敷衍するとともに日本文学と日本文化を世界的視点から考え直す優れた機会であったと締めくくった。本レクチャーは、新聞発表と同時に受講者申し込みが殺到し、主催者は抽選を余儀なくされるほどの盛況ぶりで参加者は、豊田講堂の収容人数を満了す1200人であった(中日新聞)。5年目を迎えた本プログラムの掉尾を飾る盛会であった。

関係各位のご協力に感謝いたします。(文責 釘貫 亨)

---

## ■ 西洋中世(ラテン語)・近世フランス古文書学ワークショップの概要

---

「西洋の手稿記録(4世紀から18世紀)を読む

*Lire les manuscrits occidentaux, du IV<sup>e</sup> au XVIII<sup>e</sup> siècle*」

グローバルCOE「テキスト布置の解釈学的研究と教育」プロジェクトの招きで、ソルボンヌ高等研究院名誉教授ジャン＝ルー・ルメートル博士と、夫人でパリ第一大学教授ニコル・ルメートル博士が来日し、2月20日から3日間にわたり、講義と実習指導を行った。

ジャン＝ルー・ルメートル博士は西洋中世の宗教史の専門家で、とくにネクロロギウムと呼ばれる過去帳系統史料についての世界的な権威である。若くしてフランス学士院の要請で、全国各地の教会、修道院、文書館に散在する中世過去帳の写本の悉皆調査をして目録を完成させたが、数万点に及ぶ調査を37歳で完成させ大型判2巻本の出版は、学界を驚嘆させた。

ニコル・ルメートル博士は近世史の専門家で、とくに17世紀の南フランスの農村社会を、細密な「ミクロストリア」の手法で明らかにした『書記と占師』は、忘れられたあるいは未刊の農民の記録を発掘して、これを縦横に駆使した傑作である。

両氏は3日間にわたり、午後の前半をジャン＝ルー先生がそれぞれ「ローマ大文字体からカロリング小文字体へ」、「カロリング小文字体から人文主義者書体へ」、「証書記録論」と題して、また午後の後半にはニコル先生が「印刷バトルド体から個人流の草書体へ(1)(2)(3)」と題して、講義と実習を行った。参加者はラテン語文書や17世紀の手書き本の写真版を、指名されて解読することを求められ、大学院生だけでなく、教員もまたひと昔まえの留学の折の苦労を追体験するという極めて意義深い3日間であった。

(文責 佐藤 彰一)

---

## ■ 「テキスト布置解釈学概論」(講義科目)の要約

---

本講義は博士後期課程科目の「テキスト布置解釈学」講義(原論・各論)の導入として博士前期課程の受講生を対象とし、二人の担当教員によるワークショップ形式で開講した。毎回、テキストの布置構造や解釈学に関して一つのテーマを設定し、担当教員がそれぞれの専門の観点から論点整理を行い、その後受講生とともに全体で質疑応答を行った。

### ・クレール・フォヴェルグ「18世紀におけるテキストとその解読」

本授業の目標は、本文としてのテキストとその異文を考察して、両者を対象にする解読を解釈学的な観点から検討することでした。読者かつ解釈者に伝わるあらゆるテキストはある種の布置の中に位置していて、そのテキストの布置を認識しなければテキストの概念を定義できないでしょう。ところが、原文ま

たは作者自身による本文が、写しや版本の数の多さによって、また注釈と説明によって見えなくなることはよくあることです。百科全書的な観点から見れば、実際に読まれているテキストの異文を元にして、元来のテキストの意味を解釈することは読者の役目です。

しかしながら、テキストの解読と理解はテキストが提示される形態とテキストに認められることになる権威に依存します。その上、テキストの機能自体は、時代や学問分野によって異なります。文字というのは最初に記憶として認識されます。『百科全書』においては記憶の機能に、さらに伝達の機能が加えられます。その機能は、確かに知識を伝えることですが、読者の判断力を磨くところも大事なのです。なぜなら、啓蒙思想はこのように伝わって行くからです。

したがって、テキストを観念の伝達という理念に従わせることになり、またその理念は、文字通りの意味でいうコンテキスト、いわばテキストのコンテキストと知識の再コンテキスト化の現象を重視することになります。テキストの意味がコンテキストによって与えられると考えれば、伝達の理念と解釈学との関係が明らかになります。その点では、『百科全書』は複数の観点を含んでいて、ガダマーが提起したテキストの真理という問題に通じるのです。

#### ・加納修

西洋中世における *textus* という言葉の意味の変遷に基づいて、同時代のテキスト概念を明確にしたのち、西洋中世初期から伝わる法典や証書を素材として、テキスト布置と解釈学の問題を検討した。文芸批評や哲学の分野で練り上げられた「テキスト」概念を基盤として、歴史研究で用いる史料、しかも法的な性格を有する史料を検討することは、意味ある作業に見えないかもしれない。しかし、そもそも新たなテキスト概念が、テキストの不安定さを証明する西洋中世の写本研究に支えられる部分も大きいゆえに、豊かな成果をもたらす可能性を持っている。たとえば、『サリカ法典』は同時に複数のヴァージョンで流通しており、ひとつではなく複数のテキスト布置とそれを規定する社会的環境の所産として考察されなければならない。またフランク時代の証書を、たとえばパラテキストの観点からその序文、あるいは冒頭定式や終末定式を考察することで、他のジャンルのテキスト（聖書）や他の媒体（貨幣）との関係がいつそう明瞭になり、証書を法史料として読まないことで、逆にこの時期の法史料の性格に近づくことが可能となる。

【テキスト布置解釈学各論 I】

佐藤彰一（2011年12月14、21日、2012年1月18、25日）

Hermeneutics and Time in the Text of History : Reinhart Koselleck (1923-2006)

The discontinuous image of time in history invalidates an explanation of events through cause-and-effect relationships and also neutralizes the idea of historical inevitability. That idea of the discontinuity of time received an enthusiastic support from French historians and in particular to specialists in contemporary history, thanks to a contribution by Reinhart Koselleck. I would simply mention here that the fundamental nature of the discontinuity of time must be deduced from a discussion of the scale of historical analysis.

Modern or contemporary history is more appropriate to the execution of a thick account of an event because of the huge documentation available for inquiries. Contemporary history, or what the French call “*present history*”, has the virtue of specifically asking the epistemological question “*what is event*”, by working in great detail. It is this field where one could profitably inquire into an event from the perspective of the hermeneutics of the text. It was German historian Reinhart Koselleck who got to the heart of this problem, and so doing, influenced French historians.

In his article *Theory of History and Hermeneutics*, he examines the question of what kind of relationship hermeneutics establishes with time. Without the element of time, all understandings do not know in what way they should be expressed. An understanding of the text or what is understood relates to its meaning--as an existential enterprise executed by human beings--; all of the acts of understanding are essentially tied to time”. Thus, the interest that he took in hermeneutics was most essential. As for semantic inquiry in the events of history, Koselleck’s *Vergangene zukunft. Zur Semantik geschichtlicher Zeiten* (1979) has attracted the most discussion. Among the articles contained in it, his *Space of experience and horizon of expectation. Two historical categories* produced a massive response among intellectuals in Europe and throughout the world.

In this essay, he stresses the methodological importance for historians of distinguishing between concept and category in the praxis of textual interpretation. For instance, “war”, “peace”, “force of production”, “mode of production”, “antique slavery”, and “Reformation” belong to concept and it would not be difficult to find corresponding terms in historical texts. However, Koselleck’s *space of experience* or *horizon of expectation* belongs to the cognitive category that is placed above the concept. One cannot directly deduce these meta-categories from the terms that find in

texts. For instance, the concept “war”, can be refined by way of defining more precisely what should be excluded as being part of the counter-concept “peace.” Thus, we are able to determine more exactly a semantic scope. We can do the same for the concept “labor”, by comparing it to the counter-concept “leisure”. On the contrary, a meta-historical and cognitive category,--*space of experience, horizon of expectation*--, does not permit such a procedure. Koselleck derived his epistemological position from the study of the history of concepts. Inquiring into the German term “*Geschichte* (=History)”, he recognized that its eighteenth century user referred to something “taking place”. He noticed a phrase used by the German poet Novalis *Heinrich von Ofterdingen*: “...observe the covert inter-linking of the before and after, and learn how to compose history from hope and memory.” This conception of “*Geschichte*” thus essentially lacks in meaning a consideration of the “past” that the word would be soaked semantically with what we sense now. Instead it implies a covert inter-linking of what is taking place as something that is passing away, to the future. It is what Koselleck wished to stress that one could think of a relationship to the past or the future, only after one has learned to construct a history from the modalities of memory and hope.

### 【テキスト布置解釈学各論 III】

加納修（2011年12月1、8、15、22日、2012年1月12、19日）

本授業では、6世紀初頭にフランク王国で成立した『サリカ法典』がその後どのように受容され解釈されたかを辿ることで、このテキストに価値が認められることになる歴史的なコンテキストを明確にするよう努めた。一般に『サリカ法典』は、フランク時代のあいだは法規範として実効性を有していなかったとみなされている。ただし、6世紀のあいだに付された序文が、法典本文に権威を与えようとしている限りにおいて、それを規範の地位にまで高めようとする動きがあったことは認められる。

奇妙にも、この法典のある規定（59章）が規範としての地位を獲得するのは、14世紀以降フランス王国において、まさしくこの規定に基づいて「男性の王から生まれた男性しか王位を継承できない」という原則が確立されてからである。その背景には百年戦争という政治的コンテキストや、封建法研究の高まりなどがあった。この原則は近世に入っても維持されるが、同時に『サリカ法典』は民族の過去を探る研究の中で取り上げられるようになる。19世紀に入ると、『サリカ法典』研究は国民国家的な解釈と結びつき、フランスでは概してその評価が低下するのに対して、ゲルマン人を祖先と考えていたドイツではゲルマン法

の体系的研究が進められ、『サリカ法典』研究は少なくともナチス時代が終わるまで重要であり続けた。

### 【テキスト布置解釈学各論 VI】

ブライアン・カレン

#### From Life Experience to Discourse Community

Graduate students often have considerable life experience that they can share with other students and thus help to begin to create a learning community that can foster their ability to participate actively in discipline-relevant discourse communities in the future. For example, in this course, one student was able to share his experiences of living and researching in Ethiopia, and another student was able to introduce her experiences of living in Germany. Both of these interchanges helped to both create rapport between the students and teacher, and also to let the students realize that their own contributions can be valuable in the academic context.

In order to scaffold these life experiences into useful academic learning projects, the course involved considerable development of presentation and writing skills suitable for academia.

The chosen textbook was “Academic Writing for Graduate Students” by John M. Swales and Christine B. Feak, both highly respected experts in the field of academic writing. While the textbook as not specifically aimed at non-native speakers of English, the authors’ long experience in the field of English for Academic Purposes was well demonstrated in the book by their clear examples and careful scaffolding of language that is useful for both the native speaker and the non-native speaker reader.

The course followed a task-based methodology in achieving the following goals:

- Understanding the intended audience, the purpose of the paper, and academic genres.
- Engaging in analytic group discussion
- Genre consciousness-raising
- Writing summaries and critiques
- Language focus sections that address linguistic elements as they affect the wider rhetorical objectives
- Help students position themselves as junior scholars in their academic communities
- Develop goal-setting skills
- Provide a rationale and a forum for writing academic papers

- Develop presentation skills
- Develop the abilities required to function competently at an introductory level of a discourse community

The end of semester project involved writing a 5,000 word paper related to the theme of the students' own PhD research, and to present the same research in the form of an academic presentation. The students were able to successfully complete this challenging task, and it allowed them to explore their own research in an unthreatening environment. Students chose to utilize this assignment in a number of ways. The students reported that the assignment helped them to focus their thoughts greatly and to make considerable progress in their overall research projects.

In addition to the writing assignments and exercises, the students also engaged in presentations and goal-setting exercises. During the semester, each student had several chances to make a presentation, culminating in the final presentation on the same topic as their paper.

Through successful completion of these activities, it was clear that the students were making the important transition from life experience to active participation in real discourse communities in their area of specialization.

次回のメール版 NewsLetter の発行は 2012 年 3 月下旬 を予定しています。

.....

GCOE 「テキスト布置の解釈学的研究と教育」

Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/>

---

NewsLetter No.53

発行：GCOE 編集部

編集担当：平野克典

Copyright(C) 2012 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

.....